

LD児等の特性に応じた指導方法の工夫

1 はじめに

通常学級の気になる児童のなかにLDやADHD、その周辺児童が多いことから、これらの児童の課題を解決することが、どの児童も楽しい学校生活を送ることになると「特別支援教育の推進」を学校経営の重点として位置づけた。

学校経営方針と重点

「子どもと教師の笑顔あふれる楽しい学校」

- ・「勉強の好きな子」(学習意欲を高める) ...基礎学力の確実な定着を図る。
- ・「学校の好きな子」(社会性を高める) ...集団活動を通して自己コントロール力をつける。
- ・「自分の好きな子」(自己肯定感を高める) ...よさを発揮させる特別支援教育を推進する。

2 校内支援体制

(1) 特別支援教育委員会

ア 既存の「校内就学指導委員会」をもとに校務分掌に位置づけた。

イ 校長、教頭、教務主任、養護教諭(特別支援教育コーディネーター)、障害児学級担任、該当児童担任で構成。

(2) LD児等を支援する校内体制

ア 特別支援教育の推進と生徒指導の研究を一体化し、学級経営の課題として捉える。

イ 地域の「ことばの教室」や児童相談所との連携を視野に入れる。

3 個別の指導計画の作成、活用と学習指導案の改善

(1) 個別の指導計画

ア 「学びにくい児童」や集団生活に困難をきたす児童の課題と支援の手立てを明記する。

イ 長期・短期の「計画 実践 評価 改善」のサイクルで計画や指導の見直しを図る。

ウ 目標は具体的に記述する。(例 「はっきり」「口を大きく開けて」)

エ 学年会で検討し、多面的な児童理解と指導の手立てとする。

オ 個人情報保護や文章表現に留意し、保護者に見せて了解と協力が得られるものを作成する。

(2) 学習指導案

ア 個別の指導計画と本時の活動の対応を図り、学習指導案では長期の目標を踏まえ、本時の活動でねらう具体的な目標を明記した。目標に準拠した評価を位置づけた。

イ 「本時の中で大切にしたいこと」(対象となる児童を活躍させる工夫や教師の思い)と「個を生かす手立て」(そのための具体的な手立て声掛け)

ウ 生徒指導の3機能(自己存在感、自己決定、共感的理解)を意識し、指導上の留意点に入れるようにした。

4 実践から

(1) 「学級の枠組み」を作って、A君の自己中心的な行動を改善し、学級としての落ち着きやまとまりが出てきた事例

ア やってよいことだめなことをルールとして明確化する。

イ 得意な分野での頑張りをみんなの前で認める。

ウ 目に見えるかたちの見通しが持てるサポート。

(2) 居場所を作ることからはじめ、B君、B君を支える学級集団及び保護者それぞれへの支援を通して本人の変化が見られるようになった事例

ア B君に対して

短期の個人目標を持たせる。人に迷惑をかけずやりきらせ学習規律を身に付けさせる。できたら誉めること。

自分のした行動の振り返りをさせる。一つ一つ乗り越えさせ自信を付けさせる。

イ 学級集団に対して

B君と共に育つという考え方で学級全体の枠組みを作る。(真剣にやるべき時はやる。どの人の話も最後まで大事に聞いて感想を出し合う。クラス全員が目標を達成したら短冊に記入して教室に掲げる。など)

トラブルを通して互いが学ぶ合う。B君の思いを聞き納得させてから前に進む。

ウ 保護者に対して

家庭訪問(B君の課題とともに努力の姿を伝えた。)

「お母さんの頑張りカード」(家庭学習・忘れ物点検カード)

連絡帳による情報交換・共有

5 成果と課題

(1) 成果

ア 「学びにくい子」に対する支援を学校体制で取り組んだ。

イ 校内研修の結果、児童観が深化した。

ウ 学級のルールや枠組みの確立はLD児等への特別な教育的支援と矛盾しないばかりか、どの児童にも共通の指導や支援の観点であることが共通理解できた。

エ LD児等への特別な教育的支援を学力充実の取組と連動させて、TTや少人数指導、習熟度別指導等の個に応じた指導を工夫し改善することができた。

オ 保護者や関係諸機関との連携が強まった。

(2) 課題

ア チームで協働する学校体制

特別支援教育コーディネーターの育成

チームでの協働による個別の指導計画の作成

個別の指導計画や指導記録の引継ぎによる一貫した指導の継続

イ 学力充実の取組と連動した授業改善と手立ての工夫

認知特性や学力実態を踏まえた学習形態や指導法の工夫と改善

これまでの教科研究の成果を「特別支援教育」の観点で見直し活用する。

「学びにくい子」に焦点を当てた授業の組み立てや発問の工夫

ウ 生徒指導の機能を生かした学級経営の充実

「学びにくい子」を中心に位置付けたどの子にも居場所や活躍の場がある学級づくり

「学びにくい子」についての理解・啓発の指導

ルールやスキルを身に付けさせるためのグループエンカウンターやエクササイズ

エ 「学びにくい子」に視点を当てた学習環境の整備

時間を意識させる工夫(ノーチャイムの見直し、ストップウォッチや音楽の活用)

個別の課題や学習スタイルに対応できる学習ルームやコーナーの整備

スモールステップで学ぶ教材、認知特性に合わせた学習教材の開発と共有

オ 課題を共有し共に育てる視点に立った保護者や関係諸機関との連携

「個別の指導計画」の作成等を通じた保護者との課題と手立ての共有

他の保護者への理解を進め、地域での生活がよりスムーズにいく手立て

巡回教育相談等に対応できる身近なサポートチームの立ち上げ

6 まとめ

(1) 「学力充実」、「生徒指導」、「特別支援教育」は別々のものではなく、学級経営が基盤である。

(2) 特別支援教育は、決して「特別なこと」ではなく、学校内外の人的物的資源を有効に活用し、障害の有無にかかわらず、一人一人の児童生徒を大切に最大限に能力を発揮できるよう『児童生徒の視点に立って、一人一人のニーズを把握し、必要な支援を行う』(「今後の特別支援教育の在り方」最終報告より)教育である。